

Title	法隆寺の「発見」
Author(s)	井上, 章一
Citation	人文學報 = The Zinbun Gakuh : Journal of Humanities (1990), 67: 168-180
Issue Date	1990-12
URL	https://doi.org/10.14989/48335
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

法隆寺の「発見」

井 上 章 一

- I エンタシス伝説
- II 「法隆寺建築論」
- III 「日本仏寺建築沿革略」
- IV 「日本美術史」
- V 「貞善美日本人」, 「国民性十論」

I エンタシス伝説

エンタシスという言葉がある。柱の形状をさす建築用語である。建物の柱は、たいていまっすぐにたっている。角柱であれ丸柱であれ、その太さは一定に構成されるのが、ふつうである。

だが、柱によっては、その太さが途中でかわるものもある。たとえば、ギリシアの神殿などでよく見る列柱である。これらは、柱の胴のところ、ややふくらんでいる。そして、この胴部分をふくらませる手法のことを、エンタシスとよぶ。

いっばんに、エンタシスは、西洋の古典建築に特徴的なものとされている。東洋建築には、そう多くは見られない。

例外は、奈良の法隆寺である。法隆寺の中門にある柱は、胴のところ、すこしふくらんでいる。まっすぐには、なっていない。エンタシスめいた形状になっている。その点では、ギリシアやローマの神殿を、連想させる気分があるといえるだろう。

この類似は、しばしば文化の伝播というストーリーで説明されることがある。ギリシアの古典文化がインドへつたわった。そして、中国、朝鮮をへて、日本へも伝播されていく。そのきっかけ、法隆寺の中門にも、ギリシア神殿を髣髴とさせるエンタシスがあらわれた。よく、そう論じられる。

たとえば、和辻哲郎の『古寺巡礼』も、このべている。

この建築の柱が著しいエンタシスを持っていることは、ギリシア建築との関係を思わせてわれわれの興味を刺戟する……これをギリシア美術東漸の一証と見なす人の考えには十分同感ができる……この建築は、単に柱のエンタシスのみならず、その全体の構造や気分において、西方の影響を語っている¹⁾。

もちろん、こうした指摘をしているのは和辻だけでない。ほかにも、多くの論者が、似たようなことをのべている。また、このストーリーは、しばしば、中学や高校の教科書にも採用さ

れたりしている。たいへん、有名なストーリーである。それは、東西文化の交渉を語るさいの、シンボリックなストーリーになっているとってよい。

しかし、学術的な意味では、かならずしも、全面的に肯定されているわけではない。批判も、いくつかある。とくに、建築史学のジャンルにおいて、そうである。じっさい、大学で使用される建築史のテキストには、このストーリーはでてこない。黙殺されている。

ギリシアの建築形式が日本につたえられ、法隆寺のエンタシスに顔をだす。たいへん雄大なストーリーである。気宇広大な文明論である。だが、それは話が大きいだけに、実証的には論証しきれない。着想の妙というにとどまる。かといって、決定的な反証があるのかというと、そうでもない。

要するに、この問題は、実証史学の枠では論じきれないのである。だから、たいていの建築史家は、これを黙殺する。とくに否定もしなければ、肯定もしない。そういうあつかいをうけている。

建築史の専門家たちは、言及をさける。しかし、にもかかわらず、このストーリーの知名度は圧倒的である。建築史が語りうるエピソード群のなかでも、とりわけ有名だといってよい。それは、真偽のいかんにかかわらず、日本人のあいだでは愛好されているストーリーなのだ。

では、なぜこのふたしかなストーリーが、日本人のあいだに浸透していったのか。こういうストーリーを愛好するにいたった社会的な背景は、はたしてどのようなものだったのか。これからは、以上のような問題を考えてみたい。そして、筆者なりのスケッチをえがきたいと思う。

II 「法隆寺建築論」

「法隆寺建築論」という論文がある。法隆寺の建築史的分析にはじめてとりくんだ論文である。発表は、明治26(1893)年11月の『建築雑誌』。発表したのは、伊東忠太である。

その本文は、たいへん気負った文章からはじまる。以下にその冒頭部分を紹介しておこう。

今を去ること貳千貳百拾六年マセドニアの王歴山大王功業未た半ならず……²⁾

法隆寺論の冒頭に、マケドニアのアレクサンダー大王をもってくる。意表をつく書きだしたといえる。気負いのほどが、わかるだろう。

アレクサンダー大王の東征により、ギリシアの文化がインドへつたわった。そして、それが中国、朝鮮をへて日本へも伝来する。伊東は、法隆寺をそうした文化交渉の典型例として位置づける。

その証拠として、伊東は、法隆寺中門のプロポーションをとりあげる。そして、それがエトラスカンの寺院と同一であることを力説する。

吾人は却て此のプロポーションを泰西クラシック建築に発見する……乞ふ試にエトラスカ

ン寺院の形式を見よ……乞ふ其プロポーションの如何に法隆寺中門に似たるやを觀察せよ³⁾。

プロポーションの強調は、西洋の建築美学が導入されたこととも関係があるだろう。西洋の建築理論では、全体のプロポーションをととのえることを第一とする。そして、こうした構成法は、伝統的な日本建築では、あまり意識されていなかった。だが、伊東は、法隆寺にも、西洋古典建築につうじるプロポーション構成があるという。

さらに、彼が注目するのは、中門の柱にエンタシスがある点である。

中門建築の中に就て吾人か尤も奇とする所は其柱の形状に若しくはなし、其柱は礎盤なくして直ちに地上に樹立すること猶ほ希臘ドリツク式に於けるかことく而して其輪廓は希臘の所謂エンタシスと名くる曲線より成り……⁴⁾

日本にしかないもの。世界には類例を見ない日本独自のもの。伊東はそういう文脈で法隆寺を称揚するのではない。法隆寺には世界につうじるなにかがある。それは、世界的なものだという論旨により、この寺をもちあげていく。エンタシスの強調も、その例にほかならない。

もちろん、伊東にとっての世界は、ヨーロッパの古典古代だけではなかった。法隆寺には、インド的な要素もあれば中国のそれもある。朝鮮半島の色合いもある。それら、いわば全世界をミックスさせたところに、法隆寺の重要性を読みとっていくのである。

中央亜細亜は荒漠として空しく古城残壘を留むるのみ、彼の印度の原式は已に去て跡なく、三韓蒙古の試式は千載の下に埋没し、泰西クラシックの式は独り尚ほ有無の間に彷徨せり。而してこれ等諸式の枠を取り精を聚め、以て楣式建築の極致に到達せるる推古建築は幸にして今日猶ほ蒼然として我が寧楽旧都の辺に孤立するなり。吾人の法隆寺と呼ぶもの即ち之れなり⁵⁾。

すでに消滅した全世界の建築形式が、奈良の「一寒村」に集約されている。伊東は、そこに、かぎりないロマンを感じた。そして、つぎのように、法隆寺の価値を位置づける。

其形式の明かに支那式の規模を存し、微に印度式の遺風を残し、猶ほ且つ希臘式の痕跡を留むるは其の益々趣味ある所以なり。法隆寺の建築界に於ける位置此に於てか明なり⁶⁾。

伊東は、この「法隆寺建築論」を、9月に学会で報告している。だが、そのさいには、いくつかの反論が提出された。中国やインドの寺院と法隆寺が比較検討されていないことをついたのは渡辺洪基。そして、横河民輔はプロポーションが伝播するというストーリーに疑問をさしはさむ。

公平に見て、伊東の議論には学問的な配慮がかけていたというべきだろう。彼は、具体的な調査の結果、世界の建築形式を集約した法隆寺というコンセプトを抽出したわけではない。彼の脳裏には、はじめからこのコンセプトがあった。最初から、法隆寺を世界建築史のなかに位置づけようとするアイデアをもっていた。調査には、そのためのアリバイのようなおもむきが

ある。反論がだされたのも、やむをえまい。

伊東にも、その点に対する反省があったのだろう。以後は、建築の細部形式の比較や、中国建築の具体的な調査にのりだすようになる。

注目すべきは、後者、中国建築の調査である。じっさい、「法隆寺建築論」は、中国の実情をブラック・ボックスにしたまま、ギリシア文化の東漸を語っていた。これは、かたておちである。文化伝播の過渡的な経路のひとつである中国の事情は、なんとしても究明されねばならない。

明治34(1901)年6月、伊東は紫禁城の調査をおこなうため北京へ派遣された。そして、翌年3月には、中国、インド、トルコへと留学をかねた調査にでかけている。

雲崗の石窟寺院を発見したのは、このときである。そして、伊東はこの雲崗に法隆寺につづじる建築形式を見いだす。エンタシスらしいものも発見した。ここでは、如来殿の形式を論じた部分を紹介しておこう。

仏像は多くは其容貌奇古にして我邦法隆寺金堂内の壁画に於けるものと酷似し……摸様の如きは全然我が所謂推古式即ち法隆寺式と符合せり⁷⁾

北京には、古い時代の建築はのこっていない。だが、大同から雲崗へと西の奥地にはいるにしたがって、古い遺構が見いだされるようになる。そして、この奥地へすすめば、法隆寺に似た建築形式が顔をだす。伊東の筆はこう展開されていく。

北京に於ては吾人一も「懸魚」を見ることなし、八達嶺を越へて始めて「懸魚」類似のものを見、大同付近に至つて終に完全なる「懸魚」を見る。「拳鼻」然り、「蟆股」然り、「絵様」然り、建築全体の「プロポーション」亦然り、而して雲崗石仏寺に於ては、終に我が法隆寺の影を認むるに至れり⁸⁾。

北京から西へ西へとはいりこむ。より古い遺構をもとめて、奥地へとつきすすむ。そして、ついに「法隆寺の影」を発見した。伊東のよろこびが、ストレートにつたわってくる文章である。伊東は、ついに文化伝播の証拠を見いだした。

所謂推古式なる芸術が三韓より伝来せるは論なし、三韓之れを何処より得たるか、之れ吾人の切に知らんと欲して未だ知るを得ざりし一大疑問にてありしなり。而して吾人は今や大同の付近に於て推古式の遺物を見るを得たり。吾人は是に於て、所謂推古式なるものは西域より蒙古を通過して朝鮮に入りしことを想像すべきに至りたり⁹⁾。

もっとも、これも決定的な証拠というべきではない。我田引水の観はまぬがれないだろう。伊東は、もともと、北中国の奥地に法隆寺を発見したくてたまらなかつた。極論をすれば、はじめから発見するつもりで、でかけていったともいえる。

のちに、美術史家の浜田耕作は、エンタシスの西域伝播説を「甚だ不穩当の説明」だと難じている。東西の中継点たるガンダーラ地方には、エンタシスが見られない。ギリシアと法隆寺

のエンタシスは「東西別箇に發明」されたとするべきだというのである¹⁰⁾。

さらに、伊東とならび称される建築史家・関野貞もこのべた。

此の膨みは其の起源を或は希臘建築に求めんとする学者なきにあらざれども遽かに賛成し難い¹¹⁾。

とはいえ、これらの反論にも、決定的な論拠はないのである。断定はしきれない。この点については、両者とも互角の勝負だといえるだろう。じっさい、この議論の学術的な決着は、まだついていない。昭和15年(1940)の伊東も、このべるにとどまっている。

法隆寺建築における柱のエンタシスの遠源は慥かに希臘及び西亜にあると思ふ……勿論これを具体的に証明するところまでは、今日未だ進んではゐないが、しかしかう推断するより他に適當な考察を下すことは不可能だと思ふ¹²⁾。

この議論が学者たちの注目をあつめたのは、明治30年代までである。以後は、だれもこれをまともにはとりあげなくなった。壮大な文明論ではあるが、実証研究の手においかねるということもあったのだろう。今でも、決定的な決着はついていない。

Ⅲ 「日本仏寺建築沿革略」

建築史の研究は、遺構による実物の調査と文献による来歴や年代の調査にもとずいてすすめられる。そして、そのような研究は、江戸時代までの日本には存在しなかった。建築は、考証学的な研究の対象にはなっていなかったのである。じっさい、建築に関する情報は、工匠たちに独占されていた。歴史的究明のメスは、つけいる余地がなかったのである。

大学で、日本建築史らしい講義がはじまったのは、明治22年(1891)。宮内省の技手であった木子清敬が、東大(帝国大学工科大学)で日本建築を開講したのにはじまる。もっとも、その講義は木割法の解説にとどまり、歴史のニュアンスは弱かったという。

木子について日本建築を担当したのは、石井敬吉。彼の講義内容も、くわしくはわからない。だが、木子よりは歴史に傾斜していたはずである。それは、彼が『建築雑誌』に連載した「日本仏寺建築沿革略」を通読すればよくわかる。そこには、古社寺の遺構調査や由緒年代の調査をつうじた成果がのべられている。あらっばい「沿革」ではあるが、この種のものとしては端緒に位置するといえるだろう。

注目すべきは、法隆寺について書かれた部分である。伊東の「法隆寺建築論」より9ヵ月前に発表されたものだが、中門の柱をこうあらわしている。

柱はドリツク柱又はタスカン柱の如く双盤なくして直に石敷上に立てり柱は中央に太く上部に至るに随つて細し大斗は西洋建築のカピタルに相応し其下にはアバカスの意ある厚き方形板より門は丹塗にして柱の間は隅の間八中の間より狭きこと希臘建築に於けるか如

し¹³⁾。

石井もまた、エンタシスに注目している。ギリシア建築との類似性に着目している。当時、東大にはコンドルがもちこんだ西洋建築の書物があった。それらを見たひとびとは、とうぜんギリシア建築のエンタシスを知ることになる。そして、その知識をもったうえで法隆寺をながめれば、ごく自然に両者の類似性を指摘できただろう。伊東忠太でなくとも、気づいたはずである。じじつ、石井は気がついた。

石井は、明治23(1890)年の夏に、京都奈良をおとずれ、法隆寺も目撃している。そして、ロジャー・スミスの古典建築論も読んでいた。法隆寺とギリシア建築の対比をおこなえる素地は、じゅうぶんあったといえる。

さらに、石井は、法隆寺には、「印度より支那、支那より三韓へ伝来」した形式が読みとれるという。そして、こうのべる。

聖徳太子の時代は仏寺建築発達上最上の期なり全亜細亜の諸国より粹を得たる美術の日本に発顕して永く千古の美観となりし時代なり……斯の古刹(法隆寺)は即ち亜細亜の記念なり亜細亜の歴史なり¹⁴⁾。

つぎに、石井の結論を紹介しておこう。彼は、法隆寺の建築的な価値をこう評した。

建物の配置の特別なる設計の美術に合ふ組織の自由なる割合の完美なる之を希臘のクラシック式に比するに美術上暗合する所あり¹⁵⁾

ここでも、法隆寺は西洋の古典建築になぞらえられている。エンタシスの指摘、アジア諸形式の結集、そしてクラシック建築になぞらえる評価。後年の伊東忠太によく似た議論だといえるだろう。

もちろん、石井は、アレクサンダー大王の東征には言及していない。ギリシア文化の東漸についても、あいまいな記述にとどまっている。伊東のように明言しているわけではない。それとなくにおわしているにすぎないのである。伊東の「法隆寺建築論」は、石井が暗示したものを断定的にいいきった議論だとも評せよう。

石井は、伊東の師にあたる。学生の伊東らに、日本建築の講義をした助教授である。そして、石井は、日本で最初の建築史叙述ともいえるべき、「日本仏寺建築沿革略」をあらわしていた。建築史の研究をめざす伊東が、これに目をとおしていないはずがない。

いっばんに、法隆寺を世界建築史のなかへ位置づけるのは、伊東忠太の創見だとされている。伊東を論じるさいには、まずこの点がことあげされることになる。伊東忠太伝説の眼目ともいべきくんだりである。

だが、まったくの創見だとはいにくい。エンタシスをはじめとする法隆寺論は、どうやら石井によって準備されていたらしいのである。もちろん、議論を法隆寺のみに限定し、その世界性を声高に主張したのは、伊東が最初であろう。しかし、石井の「沿革」がこれに先行して

いることもじじつなのである。

石井の存在が、世界のなかの法隆寺というコンセプトの発見史でうんぬんされることは、ま
ずない。このストーリーでは、ひとり伊東のみがクローズ・アップされている。いったい、な
ぜか。

ここで、石井敬吉という学者のその後を考えてみたい。彼は、後になって、宮内省に転職し
た。東大の助教授という職は、途中でやめている。東宮御所の造営にたずさわるためである。
さらに、その後は横河民輔のところで構造計算を担当するようになった。帝劇をはじめ、横河
工務所の仕事をささえたのは石井である。建築学会では、もっぱら構造学者として知られるよ
うになった。

石井にかわって、東大で建築史を担当するようになったのは伊東忠太である。そして、伊東
は、その後の建築史界に重鎮として君臨していった。のみならず、建築意匠の面においても、
ボス的な位置におかれるようになる。

法隆寺にギリシアを発見する。これは、伊東のキャリアのなかでも、もっとも脚光をあびる
部分である。実証的な妥当性のいかんはともかくとして、建築史のなかではいちばん華のある
ところである。この華は、日本建築史のパイオニアともくされる伊東にこそふさわしい。途中
で構造学に転身した石井にはふさわしくない。後世の建築史家たちには、無意識のうちに
そうした判断がはたらいた。だからこそ、伊東だけがクローズ・アップされるようになったの
ではないか。

後年、伊東忠太は、法隆寺の研究をころごしたころのことを、回顧的に書いている。それ
によれば、岡倉天心と小杉樞邨から多大な影響をうけていたらしい。日本建築史の構想をくみ
たてるさいには、とくにこの両者のアドバイスが大きかったという。

しかし、石井敬吉については、あまり言及していない。弟子の太田博太郎には、つぎのよ
うにも語っている。

石井さんは歴史専門ではなかった。趣味でやっていた¹⁶⁾。

石井からの影響をことさらに軽視する伊東の口調。そこには、法隆寺にギリシアを読むとい
う自らのセールスポイントを、他人の影で弱めたくないという暗々裡の作為があるといえ
ばいいすぎか。

IV 「日本美術史」

伊東忠太の「法隆寺建築論」は、アレクサンダー大王の東征を描写するところからはじまっ
ている。この東征により、ギリシア文化がインドへもたらされ、ひいては日本の法隆寺にも渡
来したというのである。こうした指摘は、石井敬吉の「日本仏寺建築沿革略」にはない。両者

の法隆寺論の差をあげるとすれば、これなどがその一例であろう。

アレクサンダー大王の話も、しかし伊東の独創とはいいがたい。おそらくは、岡倉天心からヒントを得たのだと思われる。

明治26(1893)年2月のことである。伊東は、大学院在学のまま、東京美術学校の講師となる。校長は岡倉天心。これ以後、伊東は天心に触発されつつ、日本建築史の研究をすすめていく。伊東は、当時のことを後年こう回顧する。

岡倉校長の意志は……日本建築史の講義を担当させようといふに在つたので、頻繁に会合して日本建築史の資料や組織に関する意見の交換を試みた。岡倉校長は……建築に関しても相当の研究を積まれて居るので、彼我相啓発さるる所が少なくなかつた¹⁷⁾。

天心は、明治24(1891)年9月から「日本美術史」の講義を、同校でおこなっている。すでに、彼流の美術史構想をまとめあげていたのである。日本建築史の枠組みにとりくもうとする伊東も、ごく自然にその影響をうけただろう。

つぎに、天心の「日本美術史」を検討してみたい。じつは、このなかで天心は、アレクサンダーの東征によるギリシア美術の東漸というストーリーをとりあげている。

所謂歴山王の東征にして、希臘美術の東洋に入るの端を開けるなり……希臘と印度美術と混和せるものは印度希臘風にして、此の風は支那北方のバクテリア、ゲツター等の地方に伝播したり……我が国も亦間接に印度に関係せるなり¹⁸⁾。

「印度希臘風」が「我が国」におよぼした影響の一例として、天心は「法隆寺壁画」をあげる。伊東のコンセプトも、あきらかにこれからのインパクトによるものだといえるだろう。

もっとも、天心は、ギリシア美術が日本にまで東漸したというストーリーを全面的に信じていたわけではない。どちらかといえば、懐疑的でもあった。じつ、自分から学生たちに紹介したこのストーリーを、つぎのように評している。

然れども、余は未だ此の事を以て、必然斯くなるべしと断言するものにあらず。暫らく一説として存するのみ¹⁹⁾。

さらに、このストーリーとはまったく逆の説をも紹介した。

金堂壁画の如きも、亦唐初代に於て特有の発達をなしたるの風にして、印度希臘風とは全く関係なきやも知るべからず²⁰⁾。

天心は、明治36(1903)年に、英文の著作をあらわしている。『東洋の理想』である。そして、このなかでは、ギリシアとアジア美術の関係を、否定的に論じている。たとえば、つぎのように。

仏教以前のインド美術の存在を否定して、ヨーロッパの考古学者がかつてそう見なしがちであったように、ギリシアの影響によって突如誕生したと見なすのは根拠がうすい……ガンダーラ美術はさらに深く、また一層の用意をもって研究してみれば、いわゆるギリシア

的な特色よりは中国的な特色の方が一層際立って認められるのだ²¹⁾。

「アジアは一つである」。こういきる天心にとって、アジアにギリシアの影が入りすぎるのは不都合だったのだろう。そして、彼はこうした気分を、明治20年代の前半から、萌芽的にはもっていた。だからこそ、「日本美術史」でも、懐疑的な見解をしめしたのだろう。

ここで、天心の師・アーネスト・フェノロサについてふれてみたい。周知のように、天心はフェノロサとともに、国内の古美術調査をおこなった。明治17(1884)年には、ともに法隆寺へでかけている。

フェノロサは、後年、アメリカにかえってから、大部な美術史の著作をまとめた。『東洋美術史綱』である。このなかで、彼はギリシア美術が東洋の、とくに仏教美術にあたえた影響を強調する。そして、天心をつぎのような表現で批判した。

岡倉(天心)君のような著述家は、インド、中国、日本に対するギリシア美術の影響を全面的に否定しようとする見解を持している²²⁾。

天心とフェノロサのくいちがいは、あきらかである。

前にものべたように、伊東は天心をつうじて、ギリシア美術の東漸説にふれた。だが、これは、天心にとっての本意ではない。こういう説もあるというかたちで紹介したものに、伊東は強くインスパイアされたのである。あるいは、それは天心を介してつたえられたフェノロサの議論だったのかもしれない。『東洋美術史綱』のフェノロサは、こうものべている。

日本の一部の歴史学者は……(法隆寺)の再建事業は中国経由のギリシア的仏教美術の影響を受けて行われたに違いない、と信じている²³⁾。

この「歴史学者」が具体的に誰をさすのかは、よくわからない。だが、伊東忠太らの論陣にぞくする学者であることだけは、たしかである。そして、フェノロサは、この学者にエールをおくっている。すなわち、伊東の「法隆寺建築論」は、天心ではなくフェノロサの立場にちかいのである。

伊東は、天心の学恩を強調する。フェノロサからうけた影響については、なにものべてはいない。だが、法隆寺論の構成に関するかぎり、その立場は、フェノロサ流だといわざるをえないのである。

V 「真善美日本人」、「国民性十論」

日本美術は、インドや中国からもちこまれた文化にもとずいてつくられた。「日本美術史」の天心は、この点を強調する。外国からの影響をうけない純粋な日本美術というかまえはとらない。むしろ、外国からの影響を、ほこらしげに力説する。

日本癖のものは当時の美術を以て尽く日本のものとなし、支那のものをも強て我が固有の

ものとなさんとす。然れども外国の文化を輸入せりとて、敢て愧づべきにあらず。西洋の文明は希臘、羅馬に取れり。然れども彼れは皆我が物として論ぜり。故に、我れは隋唐の文物を模倣し、以て之れを渾化せり。然らば之れを我が物として論ずるも敢て不可なかる可し。然るに強て之れを支那とし、又日本となすが如きは、真に歴史を研究するものにあらざるなり²⁴⁾。

外国の文化から独立した日本美術を強調する論者は、「日本癖」としてしりぞけられる。日本と支那を別個に論じる議論にも、批判がなげつけられる。このセンスは、10年後の『東洋の理想』に、より明確な表現となってあらわされる。すなわち、「アジアは一つである」という書きだしである。さらに、天心はこうもいう。

日本はアジア文明の博物館である……日本の芸術史は、こうして、そのままアジア的理想の歴史となる²⁵⁾

天心の「日本美術史」が開講されたのは、明治24(1891)年。その同じ年に、三宅雪嶺は、『真善美日本人』という著作をあらわした。そのなかに、こういうくだりがある。

我国の美術や固より偉大宏壮なるものありと雖も、概するに手軽くさらさらとして軽妙に渉るの風ありとす……想ふに我が家屋の構造、器物の製造、其簡略なるは著しき事実なり……寺院の構造の如きは原と明かに外邦の風を模擬せしものにして……²⁶⁾

「外邦の風を模擬」した「寺院の構造」。このいいまわしからも、あきらかなように、三宅は、寺院建築には日本人の美点を見ていない。「外邦」の影響をうけないシンプルな構成に日本美を見いだしている。日本建築史のなかから、「外邦の風」をそぎおとしていく。そして、そぎおとしきったところに日本建築の本質を読もうとする。あきらかに、天心のいう「日本癖」流の議論になっている。

「日本癖」による建築理解は、しかし三宅雪嶺だけのものではない。ほかにも、多数ある。じっさい、近代以後に刊行された日本人論や日本文化論は、たいていこういうかまえになっていた。外国の影響を否定したところに、日本建築の特色を読みとろうとしていた。

その典型は、芳賀矢一の『国民性十論』(明治40 1907年)である。彼は、仏教の影響を非日本的と位置づける。「三韓支那を通じて」はいつてきた「印度式」だときめつける。この影響のおかげで、単純素朴な日本建築もデコラティブになってしまったというのである。

芳賀が、純粋な日本建築としてもちあげるのは、白木造りの神社建築である。そこに、大陸からの影響をうけない、原日本の古朴な姿がある。そういう、国学者流の議論になっている。「日本癖」の代表例だといえるだろう²⁷⁾。

日本人論、日本文化論の多くは、この議論をそのままとりいれていた。近代日本の建築論においては、一種の常套句になっていたといってよい。そして、この常套句は、江戸期の国学にもつながっている。国学流の原始日本像を建築論むきアレンジした議論なのである。

この点で、天心の日本美術理解は、たいへんユニークである。彼は、全アジアを集約したところに、日本美術の優秀性があるという。「外邦の風」を積極的に評価する。

法隆寺は、日本における仏教伝来を象徴するような建築である。「外邦の風を模擬」した建築である。三宅・芳賀流の日本文化論だと、非日本的とおとしめられる建築だといえる。法隆寺を日本建築史上で高く評価するためには、日本文化論とはちがう図式が必要になる。

明治20年代の建築史研究は、法隆寺に焦点をあてた。法隆寺研究から建築史はスタートした。とうぜん、「外邦の風」を否定する「日本癖」は採用できない。「日本癖」の立場では、法隆寺が浮上してこないのである。

じっさい、石井敬吉も、法隆寺を「垂細垂の紀念」であり、「垂細垂の歴史」だと位置づけていた。また、アジア史的なひろがりのある天心の美術史も、法隆寺を浮上させるためには、まことに好都合だったのである。

近代以後、日本人は外国人とふれあうようになる。国際環境におかれるようになる。そうしたなかで、日本文化をグローバルに考える見方も提出された。日本癖とはちがう観念がうかびあがってきた。明治20年代には、美術史の分野でも、天心によってそういう見方が導入されている。そして、それは、建築史の法隆寺叙述にもとりいれられていく。

伊東忠太の「法隆寺建築論」は、その極端な例だといえるだろう。彼は、石井のいう「垂細垂の紀念」にはとどまらない。「アジアは一つ」という天心の枠をもとびこえる。ギリシア神殿まで、法隆寺の源流をもとめていくのである。「日本癖」からは、ずいぶんへだたった議論だといえるだろう。

伊東忠太は、よくナショナリストだと評される。偏狭な国粹主義者だという評価も、なくはない。だが、彼の建築史観は、いたってグローバルである。国粹的な面はあろうが、けっして偏狭ではない。

いまいちど、「日本癖」の建築論について考えてみよう。さきにものべたように、この種の議論は、外国からの影響を非日本的だと位置づける。外国文化からは独立した古日本の素朴さを称揚する。原始神道の建築が浮上するのも、そのためである。

こうしたストーリーは、1920年代後半になって、日本の建築界にも勃興しはじめたモダニズムの議論に連動する。じっさい、モダニズム陣営も、よけいな装飾のない原始的な神社建築を称揚した。そして、その素朴な姿にこそ日本美があるとうったえた。

にぎやかな装飾は、外国からもたらされたデザインであり日本本来のものではない。もともとは素朴に構成されていた神社建築も、仏教伝来の影響をこうむって墮落してしまった。真の日本美は、これら外來的要素を排除したところにもとめねばならない。そして、モダニズムこそがそれを追求する。以上のような主張を展開した。

モダニズムは、簡単な建築美をめざしている。そして、「日本癖」の議論も、そうした建築

をこそ日本的といいきる。両者は、その点で一致する。だからこそ、モダニズム陣営も、「日本癖」に傾斜したのだろう。

この新潮流は、1930年代から50年代にかけて、建築界を制圧するようになっていく。モダニズムのデザインが、時代の主流になっていく。事情は、建築史の分野においてもかわらない。モダニズムの価値観に依拠した歴史研究もふえていく。つまり、建築史研究の分野においても、ある種の「日本癖」が顔をだすようになってきたのである。

ここで問題になるのは、法隆寺である。この建築は、「聖徳太子の記念」という文脈で建築史研究の舞台に登場した。ギリシア美術の東漸というストーリーによって、華をそえられてもいた。「日本癖」とは対極に位置する図式のなかで、脚光をあげだしていたのである。

だが、建築史界にも、モダニズムという媒介をへて「日本癖」がはいってくる。明治20年代の法隆寺をささえたのとは、正反対の思潮がもたらされる。ここにいたり、法隆寺の建築にも、読みの変更がなされるようになってきた。

その典型は、太田博太郎の『法隆寺建築』(昭和24 1949年)である。太田は、法隆寺のなかにも、モダニズム風の簡素美を読みとっていく。「誇張に陥らぬ建築の姿、率直簡明な構造手法」があるという。そしてそれは、すぐれて日本的なものだというのである。

これらはみな日本的意匠であり、日本人の感覚であつて、決して支那的なものではない²⁸⁾。とうぜん、ギリシアやインドからの文化伝播というストーリーも、消極的にえがかれる。

当時支那の建築界はすでに相当の発達をしてゐたので、建築については西域のそれを模倣する必要なく……²⁹⁾

冒頭でものべたように、現代の建築史では、法隆寺のデザインをギリシア伝来とする議論はない。研究者たちも、口をつぐんでいる。それは実証的に論じられることではない。これが、彼らの基本的な姿勢である。

だが、それが語られない原因は、実証性うんぬんだけではないようにも思われる。モダニズムの「日本癖」が、研究者たちに目に見えぬ拘束をおよぼす。そのため、ギリシア美術東漸というストーリーが、封じこめられたという可能性もあるのではないか。

モダニズム陣営は、伊東忠太と敵対しあっていた。目の敵にしていたといつてよい。そのため、モダニズムの時代になってからは、伊東忠太の残像はぬぐいとられるようになる。法隆寺にギリシアを読む見方が建築史界から追放された一因もここにあるとはいえないか。

1) 和辻哲郎『古寺巡礼』岩波書店〈文庫版〉 1979年 229-230ページ。

2) 伊東忠太「法隆寺建築論」『建築雑誌』1893年11月号 320ページ。

3) 同上 327-328ページ。

4) 同上 330-331ページ。

5) 同上 321ページ。

- 6) 同上。
- 7) 伊東忠太「北清建築調査報告」『建築雑誌』1902年9月号 273-274ページ。
- 8) 同上 283ページ。
- 9) 同上 277ページ。
- 10) 浜田耕作「希臘印度式美術の東漸に就いて」『国華』1906年4月号 266ページ。
- 11) 関野貞「日本建築史」『日本の建築と芸術・上』176ページ。
- 12) 伊東忠太「法隆寺」創元社 1940年 104-105ページ。
- 13) 石井敬吉「日本仏寺建築沿革略」『建築雑誌』1893年2月号 70-71ページ。
- 14) 同上 72ページ。
- 15) 同上。
- 16) 太田博太郎『建築史の先達たち』彰国社 1983年 12ページ。
- 17) 伊東忠太「法隆寺研究の動機」『建築史』第2巻1号, 1940年 70ページ。
- 18) 吉沢忠校訂「日本美術史」『岡倉天心全集』第4巻 平凡社 1980年 43ページ。
- 19) 同上 47ページ。
- 20) 同上 42ページ。
- 21) 佐伯彰一訳「東洋の理想」『岡倉天心全集』第1巻 平凡社 1980年 45-46ページ。
- 22) 森東吾訳『東洋美術史綱』上巻 東洋美術 1978年 144ページ。
- 23) 同上 173ページ。
- 24) 前掲「日本美術史」15ページ。
- 25) 前掲「東洋の理想」16ページ。
- 26) 三宅雪嶺「真善美日本人」『明治文学全集』第33巻 筑摩書房 1967年 218ページ。
- 27) 芳賀矢一「国民性十論」『明治文学全集』第44巻 筑摩書房 1968年 264ページ。
- 28) 太田博太郎『法隆寺建築』彰国社 1949年 65ページ。
- 29) 同上 63ページ。